

シリーズ14

最期を生きる—第2部④ 広がるみとりの場

ホームホスピス かんなどの重い
病気で終末期を迎えた患者や障害患者
らが利用する病院外療養の一形態。家族が
介護しきれないなどの理由で、自宅での暮
らしを願つていても困難な人々を地域で受
け入れる「第二の我が家」として注目され
る。心身の苦しみや痛みを和らげるホスピ
スケアを家庭に近い環境で届ける。
法的な定義はなく、NPO法人などの民
間事業者が、民家を購入したり、借り上げ
たりして開設。入所者数人がともに暮ら
し、

細かい規則はなく、家族の出入りも自由。往診や介護、入浴などの各種訪問サービスは目前の保険で受ける。

2004年に宮崎市でオープンした「かあさんの家」が先駆けとされ、兵庫県を含めて40カ所以上に広がっている。全国ホームホスピス協会は施設一覧を公開するほか、普及に向けて運営基準を示す。一方、入居者の安全性確保に向けた改修などに初期費用がかさむことが課題で、補助金制度を持つ自治体もある。



入居者の最晩年をどう支える？

ホームホスピスでは心和む最晩年をどのように支えているのか。兵庫県内第1号の「神戸なごみの家」（神戸市長田区）理事長で看護師の松本京子さん（65）＝写真左＝と、同ホスピスで診療する森本医院（同市兵庫区）院長の森本有里さん（54）＝同右＝に聞いた。（佐藤健介）



暮らし楽しめるよう意思尊重

う生きがいのかをおのずと
考えるようになります。す
こちらが入居者に問い合わせ
るのは、どうすればうれし
いのか。「病気だから」で
はなく、「病気にもかかわら
ず」を重視して何度も話し
合い、希望をかなえます。

入居者を支える体制

- 緩和ケア専門医が24時間訪問できる
 - 薬剤師が介護職にも分かるよう薬を準備
 - 余命短い入居者を同居者が見舞うことも
 - 調理、傾聴、散髪、園芸のボランティア

仲間と家庭に近い環境で

ホームホスピス

命ある限り、自分らしく生きたい。そう願つて病院を出ても、家庭環境や経済状況などさまざまな事情から、自宅や施設で過ごしにくい人がいる。選択肢となるのが、田舎を改装した「ホームホスピス」。医療や介護に支えられ、

回周仲間とつなかりながら暮らす中で旅立つ空間だ。

「サッカーが好きやね」
洲本市のホームホスピス

アレビ画面の口こうで躍動する青いユニホーム。視線には自然と力が宿ってきた。

△居候とばかりなが暮らす中で旅立つ空間だ。

神戸市長田区に生まれ、小学校のころに両親の郷里・淡路島へ疎開した山本さん。洲本市で美容師として約半世紀働いた。時には早朝から深夜

■積極治療避ける

「ぬくもりの家 花・花」に
住む山本ケイコさん(84)=仮
名は、ワールドカップ(W
杯)ロシア大会の日本の試合
を個室で堪能。傍らには同居
人が紙と箸で手作りした口の
丸が飾られている。

昔からスポーツ観戦が趣味
で、プロ野球・阪神タイガ
ースのナイター中継にもよくチ
ヤンネルを合わせる。「自由で
ええ。夜にテレビを見ようが、
口出しされへん。家の続きを
過ぎ」しているよ」と語る。

ホームホスピス運営の特徴

- ・日当たり、風通しが良く、庭がある
 - ・生活のにおい、人の気配が感じられる
 - ・個々の生活史を本人や家族から聞く
 - ・日常的に死も話題にし、意思を確認
 - ・地域住民の医療や介護相談にも乗る

(全国ホーリーホスピス協会の基準から抜粋)

民家改装『第二のわが家』

リノベーションした木造民家が素朴で懐かしい雰囲気を醸し、中庭に四季の花々が咲き誇る和やかな風景も広がる。そして何より、同じような境遇の仲間らが迎えてくれる。「ここで寂しい思いすることなんてないわ」。穏やかに過ごす日々が始まった。

筋肉を鍛えよといひには
も余念がない。そのかいあつ
て今なお床に伏すことなく、
つえをついて自分で歩くこと
ができる。

美容室に出かけて髪をおし
やれに整え、夕食でビールも
たしなむ。天氣が良ければ中
庭に出て日光浴をし、トマト
や草花に水をやる。同居仲間
や看護師・介護士のスタッフ
と旅の思い出話などに花を咲
かせる。「戦争に病氣…。い
ろいろと苦勞もあつたけど
今は十一分に幸せや」とほほ
笑んだ。(佐藤健介)

◇次回シリーズは9月、「最期を生きる—第3部 よりよいみどりと支援策」をテーマに掲載します。電子版「神戸新聞NEXT」に過去シリーズの特集ページがあります。